

第 22 回国際 P2M 学会秋季研究発表大会結果報告 The 22nd Congress of International P2M Association Report

大会テーマ：「P2Mとソーシャル・イノベーション」

～公益と市場が共存できるビジネスモデルの創出とプログラムマネジメント～

開催日 : 2016 年 10 月 1 日
開催会場 : 東京農工大学小金井キャンパス
参加者数 : 58 名
概要



1. 研究発表

4トラック4会場において、計16題の研究発表があった。プログラムマネジメント・トラックでは、P2M理論に対する新たな視点による探究、研究開発マネジメントや企業の業務改革、ODAにおけるP2Mの有用性、P2Mを企業において実装する際の課題と解決



策などについての発表があった。イノベーションとP2Mトラックでは、P2Mがあらゆる社会的な経済活動の基礎となる価値創造に有用であること、磁性モデルがR&Dプロジェクトマネジメントにも有効であること、グローバルネットワーク経営では、人的資源マネジメント成熟度と組織文化マネジメントの成熟度が重要な要素であることなどが示された。E1会場のP2M関連と自由論題のトラックでは、情報システム開発におけるPMの引継ぎ能力モデルの提案、インバウンド戦略を志向した地方創生事業における専門人材の必要性とその育成方法、スポーツクラブ経営を題材にしたビジネスモデル・キャンパスの応用、P2Mにおいてリスクを許容する視点からのリスクアペタイトフレームワーク導入の提案などの発表があった。E2会場のP2M関連と自由論題のトラックでは、企業ビジョンを達成するためのフレームワークであるマルチプログラム・プラットフォームの適用法、イノベーションを推進するために不可欠な開発・改善・革新を専門部門が自律的に構築するための基本フレームワークの提案、製造業の製品開発における機能集約型組織の機能とその有効性、プロジェクトマネジメントにおける組織協業状態

の把握を目的として、ローレンツ理論のジニ係数を応用したチーム貢献係数を利用することの可能性などに関する発表がなされた。それぞれに活発な質疑応答があり、意義深い研究発表会となった。

2. 会長挨拶

午後の講演会に先立ち、国際 P2M 学会会長小原重信より挨拶があった。講演の労をお執り戴く講師を始め、大会に参加戴いた会員や一般の方々にお礼を述べた上で、大会の意義と今後の展望について述べた。



3. 基調講演

講師：加藤哲夫氏

TKO 代表、琉球大学非常勤講師、前ソニーエンジニアリング株式会社代表取締役社長

演題：挑戦するマネジメント

内容：



加藤氏は、ソニーエンジニアリング(株)社長時代、イノベーションを興すことによって業績を向上させた立役者である。その経験に基づき、企業はいかにして価値創造を果たすかについて語る示唆に富む講演であった。そのポイントは、ハード単体に止まらず、サービスを含めた人に感動を与える付加価値にあるとしている。

教育現場の事例として、「Tenobo 学習システム」の紹介があった。電子パッドメーカー、コンテンツ制作会社、システム制作会社、学校、行政をつなぐプラットフォームを形成した、授業や学習を支援する学習ソリューションシステムである。教師からも保護者からも感動を伴う評価を得ることができたものであり、ソーシャル・イノベーションに相応しい内容であった。ソーシャル・イノベーションにおいて大切なことは、オープン・コラボレーションであるとし、「まだ見ぬ人達との協業」をいかに実現するかがキーであるとしている。

総括として、事業創造はマネジメントの仕事であるとし、発想を根底から変える改革や事業開発は、トップ・ダウンでなければ成し得ないものであり、それを提言し、具現化できるのは「心ある現場マネジメント」であることを提言していた。更に、「経営は、勘や経験だけでなく、技術でもある」として、P2M を経営に生かすことの価値を唱えた。

4. パネル討論

テーマ：イノベーションのためのプログラムマネジメントはどうあるべきか

モデレーター：亀山秀雄氏（国際 P2M 学会副会長、東京農工大学名誉教授）

パネリスト：加藤哲夫氏（基調講演と同じ）

清田 守氏（㈱リコー品質本部シニアスペシャリスト）

湯野川恵美氏（㈱ヒューマンシステム代表取締役）

和田義明氏（キューピー㈱取締役常務執行役員）

内容：

清田氏からは、良い技術やコンセプトがあっても R&D による新規商品化につながらないという問題を取り上げ、R&D 部門と商品事業部の情報交流や文化相違、コミュニケーションの悪さが原因であるとし、その解決策として R&D 型プロマネと 3S モデルの組み合わせが重要であることについて発表があった。



湯野川氏からは、IT 産業におけるクラウドサービスにおいては、委託者はビジネス上のオーナーであるが、サービスを提供する受託者もクラウドサービス側のビジネスオーナーであり、その視点から 3S モデルの各段階において PDCA サイクルを回しながら、持続的な成長のために受託者（あるいはクラウドサービス提供者）の立場で提案をすることが大切であるという発表があった。

和田氏からは、研究を商品につなげるプロジェクトマネジメント手法としてのブーストゲートについて、事例に基づいて紹介する発表があった。

パネル討論では、モデレーターのリードの下、4 人のパネリストは会場からの質問に答える形式で活発な討論がなされた。討論の結論として、モデレーターの亀山氏からは次のようなまとめがあった。

- ① 従来のイノベーションの流れである「プロダクト➡プロセス➡ビジネスモデル」はプロダクトアウトの考えに基づいており、マーケットインの重要性が無視されている。
- ② パネリストが実践している P2M の手法とその成果より、加藤氏の提案したビジネス創生モデルである「プロセス➡プロダクト➡ソーシャル」の流れの手法は P2M の 3S モデルである「スキーム➡システム➡サービス」の流れと符合することが明らかになった。
- ③ パネリストの清田氏の R&D 部隊と営業部隊とのコミュニケーションの有効性、湯野川氏のサービスモデルの視点に立ったプロジェクト設計による価値獲得のビジネスモデルの有効性、和田氏の様々な部隊の関係者が必要に応じて参加するブーストゲートによる商品開発などの有効性などの事例により、加藤氏の

構想段階でのプロセスの意味は、マーケットインの立場に立ってプロセスを先に考えることの重要性につながるものであることが明らかになった。

- ④ P2M理論のスキームモデルにおいて、市場を想定したマーケットイン型のスキーム構想が重要であることが明確になった。

5. 学会表彰

研究発表における発表奨励賞として次の各氏が表彰された。なお、本賞の趣旨は、当学会が開催する研究発表大会において、発表の技術及び内容が優れており、将来性が認められる発表を行った会員を表彰するものである。

A会場：プログラムマネジメントトラック

柿木 健氏

(ピープルパワーユナイテッド合同会社)

B会場：イノベーションと P2M トラック

林田英樹氏 (大阪大学基礎工学研究科)

E1会場：P2M 関連と自由論題トラック

岩崎祐子氏 (四日市大学経済学部)

E2会場：P2M 関連と自由論題トラック

Mr. Jeferson Shin-Iti SHIGAKI (名古屋工業大学)



6. 懇親会

研究発表大会終了後は、東京農工大学キャンパス内にある同大学 140 周年記念会館 (エリプス) にて懇親会を開催した。基調講演講師を始め、パネリストや研究発表者、聴衆者及び大会関係者が集い、議論や親交を深める場となった。

以上

報告者：2016 年度秋季研究発表大会実行委員長 和田義明

当内容にお問い合わせある場合は以下までお願いいたします。

国際 P2M 学会事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

TEL:03-5937-5716 / FAX:03-3368-2822

当学会ホームページ上のお問い合わせフォーム URL : http://www.iap2m.org/p2m_inquiry.html